

30 久保記念館と久保猪之吉先生の思い

曾田 豊 二

九大医学部構内にある久保記念館は本邦では稀な医学博物館として存在しているが余りに世に宣伝されておらず、また常時公開展示をしていない。

この博物館は九大耳鼻咽喉科初代の久保猪之吉教授(二八七―一九三九)の名を冠したものであり教室創立二十周年を記念して、同門会員すべてが力を結集して先生の意志を体し、建設し大学に献呈されたものである。

当時、医学部校内で火災があり幸に教室はその災いを免れたとはいえ、「学者として生命と言うべき研究のための資料・図書・標本・カルテなどを防火・防震・防水の適切な保護の下におかねば」という先生の常日頃の思いに従い、急ぎ実現したものであり具体的な先生の博物館構想の始まりといえる。このことはまた献呈記念式で述べているように「今より教室長年努力によって蒐集し

た記録・標本・図書を安全に保存し得べし。是らの中には日本に於ける記録は勿論、今後の世界に於ける記録をも有するを以って之を保存し往くことは我等及び後継者の責任なり。諸氏よ。記念館の基礎を益々固くし、深く、将来我々の mecca たらしめよ」。氣宇を盛んにし、この学業の大切さを述べたことは Ino Kubo と愛称をもつて呼ばれた先生のそれまでの深い思いを知ることが出来る。

このことはまた次の事柄でも知り得る。一九一三年(大正二年)万国医学会の日本代表になり、ロンドンに赴いた折り学会の医学史の部門はロンドン・ウエルカム博物館を学会附属展覽会場として公開したが、またこの博物館を永久的医学史研究所と指定した。Ino Kubo は日本代表としてその稟議に参加しその思想と行動に感動をもったようである。それはいろいろの発言によって知ることが出来る。「collection が好事家の趣味から始まったにしても学問的筋道を至るならばその各々の医学、民族の医療を歴史的に知ることが出来る。また教育としても一日瞭然であると。」「現代の医学の進歩に対して過

去の医学の歴史の大切さを知らねばならない。」「過去から現在を知り将来を窮えるものとして(博物館は)百万言を要せず見るものに真実を知らせうる」といった。また弟子、後進に対し世界各地に赴いた時必ずその土地の大学研究機関の医学博物館見学をすすめた。Ino Kubo も一九二四年に、自分の関与したウエルカム博物館を再訪し、医学史博物館としての発展充実を見て、それは「医学の歴史とともに研究と教育の大本である」と述べている。Kubo Museum に所蔵されているものについては昭和九年十一月(久保編・監輯)の「久保記念館」が刊行され目録・写真及び解説がなされている。後昭和三年、五三年(河田政一編・監輯)また昭和六十年「久保記念館第二版(上村卓也編)がある。

蔵書に関してはその広範な「図書目録」第一輯(昭和二年五月)及び第二輯(昭和二年七月)(久保(猪)編監輯)があり網羅されている。

久保記念館は当初より第一部は図書及び図譜類、第二部は久保教授に贈呈された専門家の肖像及び遺品、第三部は標本類、第四部は機器類、第五部は雑と見事に整理

分類されていた。初期は耳鼻咽喉科史料展覧会目録及び解説(昭和二年中外医事新報 pp. 511~525)に詳しい。その後 Ino Kubo 定年迄に蔵書はさらに殖え、後にその親交あつた内外諸学者の遺族や近親者より寄せられた遺品も収納されている。「医史家としての久保先生」岩熊哲氏の評価は高い。それは九大に於ける医学史は久保・小川両先生の世界的観点の流れを伝統として培われたこと、また久保記念館に収納された図書類洋書と書古書とその整理・編纂の様子、そしてその蔵書の質の高さ、深さそしてその選択力を述べている。ただ惜しむべきはかなり散失し Ino Kubo の東京の自宅の焼失とともに失われたものが多々あることである。

(福岡県地方会)